

ウェーベルン:弦楽四重奏のための緩徐楽章

アントン・ウェーベルンがシェーンベルクに作曲を学び始めたばかりの 1905 年に書かれた作品で、生前には出版されず、没後、遺稿のなかから発見された。《夏の風のなかで》などと同じく習作期の作品に属するため、後期ロマン派の影響を色濃く残している。

シューベルト:弦楽四重奏曲 第 14 番《死と乙女》

1824 年に書かれた本作は、シューベルトのペシミスティックな情感が色濃く反映され、4 楽章すべてが短調で書かれている。第 1 楽章の冒頭で奏される峻烈な主題が作品の性格を物語り、ロマン的な美しさを持つ第 2 主題も、どこか不安な緊張感に満ちている。第 2 楽章には、シューベルトが 20 歳の頃に書いた歌曲《死と乙女》(死を恐怖する乙女と甘いささやきで彼女を誘う死神との対話からなる)が変奏の主題に用いられている。第 3 楽章は、激しい感情がほとばしるスケルツォだが、そのなかにもシューベルトらしい抒情が立ち現れる。第 4 楽章は、4 つの楽器のユニゾンで奏される冒頭主題と、流れるような旋律の第 2 主題とが絡み合いながら怒涛のコーダへと流れ込んでいく。